

## 映像に触れて、言葉を紡ぐ

「正解のなさ」と向き合った 大学生の対話の記録（全文）



## はじめに

これは、私たちの対話の記録である。

13年前に発生した未曾有の出来事に正面から対峙し、  
このことをめぐる映像表現が持つ意味を懸命に探り、  
被災地に生きた人々の感情や経験を真に実感することのできないもどかしさと  
言葉を紡ぐということの難しさに何度も直面しながら、  
それでも“3.11”を分かち持つことに挑戦した記録である。

お茶の水女子大学で2023年度後期に開講された授業「民族誌学特殊講義」の履修生30人は、  
震災後に市民が撮影した「わすれん！」の記録映像を視聴し、対話型ワークショップを行なった。  
「地震・津波の再来に恐怖を感じながらも、今もなお住み続けるのはなぜか？」  
「“よりどころ”とはどんなものか？あなたにとっての“よりどころ”とは？」  
「震災の当事者とは？」  
「“弔う”ってどういうこと？」

どこまでも正解がないような4つの問いを巡る対話。

その中で私たちが紡ぐ言葉はどこかたどたどしくて、ときに「語れなさ」の感覚が自己自身に  
突き付けられた。

また、対話の様子を文字に起こし、その日私たちが語った言葉にもう一度向き合った今回の一  
連の展示制作は、被災地のことをうまく言語化できない私たち自身を対象化することをも意味  
した。

私たちには、3.11のこと、被災地のこと、あの日失われた誰かの大切なもの・こと、  
震災前にたしかにそこにあったはずの暮らしのこと、  
今でもわからないことや思い出せないことがたくさんある。

それでも、この対話型ワークショップにて、一人ひとりが自分事化した形で問いを再解釈しな  
がらその答えを探っていく過程を通して、「私たちも語っていいんだ」と思うことができた。

そして、これはあなたへとつなげる対話のバトンでもある。

今この瞬間も失われていく記憶や風景がある。

その中でも、私たちがともに3.11に思いを馳せ、悼み、考え続けるという道とその先に拓けた  
未来は、今日を生きる者たちに残された希望であるだろう。

私たちお茶の水女子大学の学生による対話の記録が、あなたが明日新たに紡ぐ言葉や抱く問い  
へと形を変え、また違う誰かへと言葉や想いが語り継がれる営みが永く続くことを願っている。

## 目次

- 01 はじめに
  
- 03 『生きられる家（1）岡田地区 吉田さん宅』をめぐる対話  
— 今もなお住み続けるのはなぜ？
  
- 08 『石と人』をめぐる対話  
— “よりどころ”とはどんなもの？
  
- 12 『過去を見直して、今を見つめる』をめぐる対話  
— 震災の当事者とは？
  
- 17 『参佰拾壹歩の道奥経抄』をめぐる対話  
— “弔う”ってどういうこと？
  
- 22 おわりに

本冊子は、「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」の協力を得て、2023 年 12 月 6 日にお茶の水女子大学の授業（担当：丹羽朋子）で行った対話ワークショップの記録を、学生有志が編集したものです。

対話ワークショップに参加した 30 名は 4 グループに分かれ、各映像について話し合いました。文中の話者 A～H のアルファベットは、ワークショップを実施した際に各グループで着席していた席順を示しています。

## このワークショップで使用した「わすれん！」の記録映像

---

わすれん！の参加者やスタッフが記録した映像を、「わすれん！ DVD」として発行しています。  
これらの DVD は、せんだいメディアテーク 2 階 映像音響ライブラリーにて貸出しています。

### 生きられる家 (1) 岡田地区 吉田さん宅



制作 | 3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター  
撮影・編集 | 佐藤貴宏 (わすれん！スタッフ)  
撮影年月日・撮影地 | 2011 年 8 月 8 日 (宮城県仙台市)  
制作年 | 2011 年  
収録時間 | 15 分

仙台市宮城野区の岡田地区に代々住み続けてきた吉田祐也さんは、同じ敷地内に所有する 3 軒の家が津波で大きな被害を受けました。この地に住み続けることを決めて家を修復し始めた吉田さん宅の、被害状況と修復の記録です。

### 石と人



制作 | 小森はるか、FIVED  
撮影年月日・撮影地 | 2014 年 -2016 年 (岩手県陸前高田市)  
制作年 | 2016 年  
収録時間 | 19 分

津波により家屋すべてが流された陸前高田市森の前地区。そこに残された巨石「五本松」は、昔から地元の人びとのよりどころでした。かさ上げにより間もなく埋められてしまう「五本松」を中心とした地域の伝統の復活と、あらたな表現を模索する佐藤徳政さんの活動の記録です。

### 過去を見直して、今を見つめる



制作 | 杉本健二  
撮影年月日・撮影地 | 2012 年 9 月 5 日 (宮城県女川町・石巻市・仙台市)  
制作年 | 2013 年  
収録時間 | 74 分

大学進学により仙台で震災を経験することになった杉本健二さんは、石巻市の大川小学校区に実家を持つ友人の案内により、初めてその地を訪ねます。変わり果てた光景や、家族から聞く住民の葛藤や思い、そして友人のまなざしを前に、その現状と向き合おうとした記録です。

### 参佰拾壹歩の道奥経 抄



制作 | 宙崎抽太郎  
撮影年月日・撮影地 | 2015 年 9 月 (宮城県仙台市若林区荒浜)  
制作年 | 2021 年  
収録時間 | 15 分

故郷・仙台が津波被害に見舞われつつも、なかなか足を運ぶことができなかった宙崎さんは、2015 年によくその地を訪れ、ただただ歩きながらビデオカメラを回しました。当事者とも非当事者とも言えない微妙な距離感の中、関われなさや語れなさを乗り越える術として生まれた表現です。

# 『生きられる家（1）岡田地区 吉田さん宅』をめぐる対話

視聴した映像：『生きられる家（1）岡田地区 吉田さん宅』（撮影：佐藤貴宏）

## 問い： 地震・津波の再来に恐怖を感じながら、 今もなお住み続けるのはなぜだと思いますか？

**話者 A** 『生きられる家』という映像は、仙台の海沿いの地区に代々住み続けてきた吉田さんの、3つの家が全て津波による大きな被害を受けたという話でした。ぐちゃぐちゃになった家を見て、はじめは片付ける気も起きなかったけれど、ボランティアの方が家の中をきれいにしてくれたのを見て、家を直そうと決めたと話されていました。

自分も以前ボランティアに参加したことがあって、誰かに感謝されるためのものではないと思ってたけど、誰かの生活を支えることにもつながってたのかもしれないな、と思いました。

**話者 B** 被災があった後に家を直して復旧したっていう部分メインで、私、今まで被害の様子をニュースで見たことはあっても、そのあとがどうなったかっていうのは見たことがありませんでした。家を直すのは途方ない作業だと思うとともに、それでも住み続けようっていう意思がすごい、強くなって感じました。

あとは、高齢の方でも津波を経験したことがなくて、逃げようと言わなかったという話があって、たった100年間その地域に災害がなかっただけで、危機意識ってなくなっちゃうんだなって。世代を超えて伝えていかないと、同じようなことを繰り返してしまうと思いました。

**話者 C** そのお話のあとに吉田さんが、「伝えていくのって難しいですね。」とおっしゃっていたのがすごく印象に残っています。私は3.11の時、学校から家に帰ってきて、祖父母と一緒にテレビ中継を見ていました。祖父母も私と同じように驚いたりとか、怖いねと言ったりしていて、祖父母でさえも未経験であるということが衝撃でした。やっぱり高齢の方たちは長く生きているぶん言葉に重みがあるので、下の世代はそれを鵜呑みにしてしまう。わすれん！のスタッフの方が、3.11のときに生まれてなかった人がわすれん！の施設を訪れてくれていると話されていたのを聞いて、もうそんなに時が経ったんだと感じました。これまでは、3.11を知らない世代の人たちに言葉で伝えていこうという気持ちがなかったもので、自分も震災を経験した一人として伝えていくというのは大切な、と改めて思いました。

**話者 D** 当時はどこにいたんですか？

**話者 C** 埼玉県です。

**話者 D** 壁を指しながら「ここまで波が来た。」みたいな話をしているシーンがあって。普段飲んだり、手を洗ったりしているような、生活の中にありふれたただの水が、家や壁を

突き抜けてくるのとか、人間が抗えないほどの力を持つというのをあまり想像できなくて。でもたしかにここまで水が来て、家がなくなったんだというのがよくわかりました。

今は発信するためのいろんな媒体が増えているのに、伝えることの難しさはなぜ変わらずあるんだろうということは思っていて。でも、むしろ発信することのハードルが下がったことが情報を溢れさせてしまって、重みや関心を分散させてしまったのかもしれない。

あと、また津波が来るかもしれないと知りながらも、とどまり続けようと思わせるものは何だろう、土地が人を結びつけてるものは、人を離さないものは何なんだろう、というのも考えさせられました。人がその土地を思う気持ちみたいなものが気になるなど。

**話者 F** ふるさとに住み続けようという考えが、私にはあまりないものだなと思って、印象的でした。水害が起きて家が水浸しになったら、片付けなくちゃいけないというのはなんとなく理解していましたが、全部やり遂げようとする、何年もかかって大変なんだと改めてわかりました。

床板をはがして、畳を張り替えて、板を張り付けて……って、一つ一つ考えると本当に途方もない作業。いざ自分がそうになったら家を手放して新しい場所に行くだろうと思うので、その地域に住み続けるというところに、人と地域のどのような結びつきがあるのだろうと思いました。吉田さんが高齢者の伝承について話していたので、先祖代々の土地だからという意識が強いのかなとも。

**話者 E** 私は内陸の国の出身で津波は来ないので、当時はあまり馴染みのないことでした。でも今改めて津波の映像を見てみると、言葉では表せない感情になります。逆らえないじゃないですか、自然だし。

先ほど話に出た、その地域から離れられないということについては、長く住めば住むほど、その土地や人に対してさまざまな感情が生まれてくるだろうから、その気持ちはわからなくもない。私はずっと前から日本に行きたいって言ってたんですけど、親戚からは、もし日本に行ったら津波の被害に遭うかもしれないよ、と言われていました。私は元々いた土地にはあまり未練がなかったので、そこを離れてもいいと思っていたんですけど、震災が来ても離れたくないって強い気持ちもわかるような気がします。

**話者 F** 土地と人とのつながり、復旧にかかる時間と手間、

世代間の継承、自分がどう伝えていくかといったトピックが出てきました。

**話者 D** なにか一つを掘り下げてみます？

**話者 F** もし自分のいる地域が災害にあったら、動くか動かないか、とかはどうでしょうか。

**話者 A** 私は当時も今も、千葉にいます。結局、私は土地というよりも人の方に愛着があるって思っています。もし友達が皆いなくなったら、そこに住む意味はないかな。

でも、吉田さんの地区の場合は住民の半数ぐらいが残って、半数ぐらいは別の場所に移っていったようなので、吉田さんがとどまった決め手は周りの人ではなかったのかなと感じました。

**話者 B** 私は東京生まれ東京育ちで、都内を転々としてきました。生まれてから10年ぐらい住んでいた場所にいた時なら迷ったかもしれないけど、今は近くに知り合いもいないし、SNSでつながることができる時代だから、離れてもいいかなと思います。

**話者 D** なるほど。場所を変えてもSNSで人とつながることはできますね。

**話者 F** この映像が作られたのは少し前なのかな？

**話者 A** 2011年ですね。

**話者 D** 当時と今とでは、人とのつながり方が変わってそうですね。

**話者 C** 私は生まれも育ちも埼玉です。埼玉の田舎に住んでいて、自分の家以外にも田んぼや畑なども持っています。先祖代々、同じ土地で家を建て替えながら住み続けていて、人というよりも土地への愛着みたいなのがあるので、私だったら動けないんじゃないかなと思います。

**話者 D** 私は愛知出身で、今は大学の近くに住んでいます。地元への想いは、だんだん変化しているような気がしていて、元々は未練がなかったんですよ。というか、だから出てきた。けれど、いざ移動してみたら、意外と自分のアイデンティティが地元と結びついているかもしれないと気づきました。そこで生まれた何かがこの自分につながっていると思うと、地元に対する見方も変わってきますね。

**話者 E** 私もさっき言った通り、土地に対する未練はあまりないけど、今は離れて暮らしている家族と一緒にいたいという気持ちがなくもない。誰の近くにいるかが大事かもしれない。でももし震災があったら、おそらく、うーん……残ると思う。「こんなことがありましたよ」って人に伝えるために、海外から来た人として、国内だけでなく国外にも伝えられるようにしたいです。

## 「問い」をめぐる対話

**話者 F** 私は親の転勤の都合で、いろいろな場所を転々とし

てきました。今は埼玉に家族と住んでるんですけど、人とのつながりもあまりなくて、今は地元の友人とも頻りに会うわけでもなくて、SNSのつながりで事足りるし、先祖代々の土地というわけでもない。なので、もし被災をして家を直すということになったら別の地域に移るかな、と思います。

ただ私も今、親族が近くに住んでいるんですけど、もし親戚同士で近くに住んで、助け合って暮らしているような場合だったら、その地域に住み続けるということもあるのかなと。

**話者 G** 私は神奈川県鎌倉市の由比ヶ浜海岸のすぐそばに住んでいるので、すごく自分事として3.11の大震災を経験しました。家族の間で何度か内陸の高台に引っ越すことを考えたこともあります。私の場合は、家族に介護が必要な高齢者が2人いたので、介護との両立を考えると移住は難しいということになって、結果的に今も同じところに住んでいます。あとは、土地を購入してしまってるので、なかなか動きにくいという事情もあって。だから、被災した方々も同じようなことを考えたんじゃないかなと。

**話者 D** 人とのつながりとか、先祖代々の土地であるとか、土地を買っているとかが関連していて、それが動きやすさを決めているということですかね。

では逆に、移動した人はどうしてその選択をしたのか、その選択を取ることができたのかということについて考えてみたいかなと思ったんですけど、どうでしょう？

**話者 F** もし住み続けることが難しいぐらいのトラウマとかがあったとしたら、地縁よりも優先されるのかな。トラウマがないとか、被害が比較的小さかった人の方が、もしかしたら住み続けようと思えたのかもしれない。

**話者 E** もし子供のいる家庭だったら、子供を守りたいと思うんじゃないかな。子供にトラウマを与えないようにとか、将来のことを考えるといます。子供を守らなきゃいけないという気持ちが働くんじゃないでしょうか。

**話者 F** 独身なのか、家庭に大人しかいないのか、子供もいるのか、高齢者がいるのかとかも関係しそうですね。

**話者 D** 今後生きる年数とかも関係ありそう。

**話者 E** 経済面から考えてみても、移住はすぐに決められるものでもない。

**話者 A** 経済の話だと、たしか吉田さんが、建て直すのにお金がかかると話されていた気がします。建て直すのにもめちゃくちゃお金がかかるし、新たに引っ越すにしてもお金がかかるんだけど、国からの援助は少ない。

**話者 F** やはり金銭的な余裕がないと難しいかもしれない。

**話者 D** 建て直すにも引っ越すにもお金がかかるけど、住み続ける方を選択したってことですね。

**話者 A** そうですね、どちらにせよ膨大なお金がかかるっていう話だった。

**話者 D** そこには何らかの理由が……。

**話者 A** 強い思いがないと、住み続けられないよなって思い

ます。

**話者 D** 先ほどトラウマの話が出ましたが、意外と離れてしまった方が距離がとれて、忘れられるのかなっていうふうにも思います。住み続けてるってことは、常に過去を蘇らせる装置が近くにあるということにもなるのかなと。

**話者 A** 忘れたくない、みたいなことですね。

**話者 D** 忘れたくないのか、忘れたいのか。移動せざるを得なかったパターンもあるかもしれない。

**話者 A** 全部がきれいに分けられるわけじゃないってことですよ。

**話者 C** 私の友達で、福島で被災して埼玉に引っ越してきたという子がいたんですけど、その子は放射能の問題で、どれだけ続くかっていうのが判断しがたかったから引っ越してきたって言っていました。それを私に打ち明けてくれた時も、たぶん誹謗中傷を受けたこともあって、すごく怯えながら慎重に告白してくれたのを覚えています。だから引っ越しても引っ越さなくても、何らかの形で放射能に脅かされ続けるっていうか、その恐怖からは抜けられないのかもしれないと思うと、住み続けた方がいいのか、引っ越した方がいいのかって、判断が難しい。

**話者 D** 脅かされ方が物理的なものなのか、言葉とかなのかで違うけど、いずれにしろ何らかの影響は受けるってことですよ。

**話者 F** それについての判断は個人の価値観によると思うんですけど、もし今までいた地域にとどまるのであれば、同じような経験をした周囲の人たちと、その経験を共有しながら生きていける。そういった点で、住み続けるという選択をした人もいるのかも。

**話者 D** ここまで聞いて思ったのが、見えないものに対する恐怖って今もあるなと。たとえばコロナとか、今はインフルエンザが流行っているし。やっぱりコロナ禍で思ったのは、どんな害があるのかとか、死ぬ可能性がどれくらいあるのかがある程度科学的にわからないと怖い。そういう見えないものやわからないものに対する恐怖に打ち勝つってすごく難しい。その恐怖を抱えながら進み続けなきゃいけないから。

**話者 F** 先行きが見えないまま……。

**話者 D** たしかに、わからないことが一番怖い気がする。

**話者 A** 今となっては震災がどういうものだったのかとか、原発事故がどういう事故だったか、コロナもどういう威力を持っていたのかとかがわかってるけど、当時はいろんな情報が錯綜していて、何を信じたらいいのか分からなかった。

この映像に出てくる方たちは、どういう気持ちで住み続けるって決めたんだろう？ そういう問題に対する無視もあるかもしれない。どんな考えを持っていたのかが気になるな、と思いました。

**話者 E** うーん、無視というか、個人的には感覚が麻痺しきっているのかなと思います。コロナも始まったばかりの時

は、みんな意識して手洗いやうがいとかしてたけど、今はそこまでやらなくなってる人も多いじゃないですか。だからそれと同じように、引っ越せなくて最初は怖い思いをしてたけど、やむを得ず住み続けてたら知らぬ間に日常化しちゃって、そこまで考えなくなったのかもしれない。むしろ引っ越した人のほうが、現実から離れたぶん、急に思い出すことが多かったり、心に残ったりしてるんじゃないかなって思います。

**話者 F** 「〇〇だから住み続けよう」「△△だから離れよう」という理由が先にあったんじゃないって、離れるか離れないかの選択をした後で、理由を付け加えていって……みたいな感じなのかもしれない。残る選択をした人は、思い出を他の人と共有したり、日常化したりしながら生きていて、逆に離れていった人は、周りの人からいろんな目で見られるかもしれないという問題を抱えながら、それを覚悟して生きているのかも。その選択をしたことで後から問題ができてきたっていう感じなのかな。

**全員** うーん……。

**話者 F** でもその選択については、経済的なこととか、地域の縁とかもくっついてくるから、堂々巡りになるかな、と思いますけど。

**話者 D** 決断を迫られて、そこで強く作用したのって、きっとその時に信じたものとか、経済的なこととかだったのになって。そうですね、一つずつ理由付けて決断しているほどの時間はなかつたろうし。私たちが決断する時だって、必ずしも一つずつ理由付けているわけじゃないですよ。

**話者 F** 住み続けたからこそ、恐怖を乗り越えなくちゃいけないって決意みたいなものが、後からはっきりとしてきた感じなのかなって。

**話者 D** そうかもしれない。私たちからは強い意志を持って選択したように見えるけど、もしかしたら住み続けている中で意志が沸き立ってきたのかもしれないですね。

**話者 G** 俵万智さんが、震災の1年以内に子どものために沖繩に移住したっていう話を聞いたことがある。その時に、有名人で、それなりに経済力があって、全国にいろんなネットワークを持つ自分だからこそ移住ができたみたいなことを発信されていて。移住したという選択は自分の中では正しかったと言えるかもしれないけれど、自分のような選択をできなかった人に対して何ができるだろうみたいな、罪悪感とか責任感みたいなものを感じておられたのを覚えています。

**全員** (頷く)

**話者 B** 話が戻っちゃうんですけど、なんで移住した人としなかった人がいたのかみたいな話で、津波で周りのものを全て流されちゃった後に、人間の医療は優先順位が高いけれど、動物病院とかは後回しになっちゃうんじゃないかなと思いました。ペットショップとかが近くになっちゃうから、ペットを飼っている人は引っ越さざるを得ないとか。

**話者 A** 逆に移住しなきゃいけない理由があって移住する人

が周りにいるからこそ、自分は残らなきゃ、みたいな気持ちにもなることもあるかな。わかんないけど。

**話者 D** 周りが出ていっちゃうから？

**話者 A** うーん、周りは移住しなきゃいけない強い理由があったりして、必要に迫られて移住してるから……なんだろう……。

**話者 F** していいのか、してはいけないのか、みたいな。

**話者 G** それ、ありますね。

**話者 F** 自分に移住が許されているのか、許されていないのかというところで、サバイバーズ・ギルト（註：犠牲者に対して生存者がもつ罪悪感）になりがちなのかな。

**話者 A** そう、そんな感じ。自分が残らなきゃみたいな。

**話者 C** 私たちがここまで話してたのは「住み続ける選択したのはなぜか？」についてで、「今なお住み続けているのはなぜか？」という方があまりなかった気がします。先日、仙台出身のわすれん！のスタッフの方が、震災の何年後かに仙台に戻ったという話をされてましたが、もし私が今、学校とか親の仕事の関係で、「東北に引っ越しけどどう？」と言われてたとして、引っ越しを受け入れられるかなって。地震や津波の大きな被害があったという印象が強いから、やっぱり怖い。私だったら、今移住する決断はしないなと思います。復興も進んで、住んでる人も増えてきたと思うけど、今なお住み続けているのは、やはりなんでなんだろう？

**話者 D** 災害リスクが躊躇われる理由の一つかもしれないですね。

**話者 C** そうですね。今住んでいる埼玉は、山もないし海もないし、安全なんですよ。だから、海の近くにもあまり住みたいとは思わなくて。山の方に住むのも、すごいなと思います。

**話者 D** 今住んでらっしゃる環境が、そのような防災意識につながってるのかもしれないですね。

**話者 C** 災害リスクの高い地域が地元だったら、どうなんだろうって思いますね。だから、「今なお住み続けているのはなぜか」という点は、元々自分が住んでいた地域で何か問題があったとしても、そこに住み続けるのかということなのかなと。

**話者 D** 私の地元は愛知県で、南海トラフ地震のエリアなんですよ。小学生の頃から起こると言われ続けていて。地震が起きるんじゃないかなという気持ちがどこかにありながら、常に生活をしていました。東京も首都直下型地震が来るって言われていますよね。でもこういう可能性の話をどこまで生活の選択肢に取り入れるのかって、すごく難しいと思います。

**話者 A** たしかに、他のことの方が優先されそうですもんね。

**話者 D** そうなんですよ、やっぱり日常はずっと続くって思ってしまうから。今ある日常が選択の前提になってしまうっていうのはあるのかなって。

**話者 F** 日常生活への愛着みたいなものが、そこに住み続ける選択をさせるのかな。それこそリスク最優先だったら、み

んな“安定大陸”に引っ越したいから。

**話者 A** そもそも日本っていう国自体が地震がたくさん起きているけど、じゃあなんで日本から出て行かないのっていう問題にもつながる。

**話者 D** そのスケールで考えたら、わかることありそうですね。

**話者 A** 自分も一員になってるから。

**話者 D** 日本は災害リスクが高いと言われてるけど、でもあえてEさんが日本に来て住もうと思った理由って何かあったりします？

**話者 E** 先ほども言った通り、親戚とかには止められてはいたんですけど、日本に人は住んでいるし、私は日本に来たかったから。もちろん災害に遭う可能性はあるけど、でも逆らえないし、運命だなって思う。海外では、「仕方ない」で流せる日本人の考え方はどうかと思うという意見もあるんですけど、震災は仕方がないと思う。日本人を全員世界にばらまけるかって言われたら、それもできないし。地震が多いから、建物の造りが他の国と比べてしっかりしているし、技術もどんどん進化しているから、もしかしたらいつか震災を避けられるかもしれない。恐怖を理由に行かないでおこうとかじゃなくて、どうしたらそれを乗り越えられるかを考えて、前向きにいた方がいいんじゃないかなって思います。

**話者 D** そうですよ、人がいなくなっちゃいますもんね。

**話者 C** 無人島になっちゃう。

**話者 F** 日本から移動しないっていうのは、その可能性とか、言語の壁とかが理由としてあると思います。その規模を小さくしたものが、震災があった土地から出て行かないっていうところになるのかな？

**話者 D** そうですよ。国を越えてなかったとしても、気候が違うとか、方言が違うとか、氣質が違うとか、そういう違いに触れるのって大変なことなのかもしれない。住む場所を変えるっていうのは、なかなか難しいですね。

**話者 F** 住む国を変えるとか、住む大陸を変えるとか、そういう規模の大きい話になればなるほど、できる人は少なくなっていくと思うんですけど、隣街にとか、隣の県にっていうような小さい移住であっても、できる人やそのハードルを乗り越えられる人っていうのも限られてくるのかな。小さいハードルだけど、確かにそこにハードルはあると思う。

**話者 D** もし2歳とかだったら、新しい土地に適應していくのは自然とできそうだけど、40歳とか、微妙な年齢だったらどうなんだろう。

**話者 F** 仕事があったり。

**話者 D** そう、仕事があったり、その年齢から新しいことを始めることに対する腰の重さも、人によってはあるのかもしれない。

**話者 F** ここまでの話をまとめると、理由や意志よりも、移住をするのかしないのかという選択がまず先にあるんじゃない

いかということ。そして移住する／しないってことの前に、移住できる／できないという可能性があるんじゃないか。あとはそれに伴って自分は移住していいのか／いけないのかを考えるという問題があるというのがありました。

次に、「今もお住み続ける」ということに関しては、どんな規模の移住であれ、年齢や地域の縁などといったハードルがあるんじゃないかという話になりました。以上です。

**話者 D** 色々な要素があって難しいですね。今までの話を踏まえて、この問いにアンサーをするとしたら、ってことですよ。

**話者 A** 恐怖というのが難しいなと思います。想像し難いものだから。

**話者 D** さっき、仕方ないという話が出てきたけど、常に恐怖に怯えてたら生きられないから、ある程度折り合いのつけどころや、精神のよりどころを見出せてるのかもしれない。



# 『石と人』をめぐる対話

視聴した映像：『石と人』（制作：小森はるか・FIVED）

問い：“よりどころ”とはどんなもの？ あなたの“よりどころ”はなんですか？

**話者 G** 『石と人』の映像は2014～2016年くらいに撮影されたとキャプションにあって、当時の被災地は全然復興とか終わってない時期で、まだ仮設住宅にも住んでるし、道路の補修も終わってない。そういう震災からの復興の最中に、そこに住んでる人たちがこんなに地元のことが好きだったんだとか、この地元が好きだからこそ、そこに次に住む人たち、その地を受け継いでいく人たちのために神楽とか、新しい伝統を作っていたのかなと、すごく地元への愛に溢れているように思いました。

**話者 H** 私は東京出身で、“地元愛”みたいなことについて考えたことなくて。同じような境遇になった時に自分がどう思うかはわからないけど、ここまですごい地元のことに考えて動いてらっしゃるのが、正直自分とはちょっと違う感覚だったなっていうか、それがすごい印象的でした。

**話者 F** 東京のどちらですか？ 地元のお祭りとかは？

**話者 H** 世田谷。地元のお祭りはあって行った記憶もあるけど、私そんなに愛着もなくて。地元めっちゃ好きか、って言われたら、嫌いじゃないかなぐらい。

**話者 F** わかります。私も東京出身。地方出身の方は？

**話者 D** 私は山梨。でも、映像を見た自分の感想は地元を絡めた話ではなくて、映像の中にとびとび挟まる石のカットが印象的。

たとえば石が映った後に、神楽を待ってるシーンがくる。ただの石の映像でも、前に映るものとのつながりによって意味が変わってくる。

あと、石は人がどうこうして作った人工物じゃなくて、自然にできてずっとその土地にあるものなので、人が持っている記憶よりも石が持っている記憶の方が長く残るし、個人には見えていないような記憶も石が持っているっていうふうに捉えられる。巨石は、同じ時代に生きる人たちの記憶を再生するのと、その後にその土地に住む人の記憶を残していく装置にもなっていくんじゃないかなって思いました。

**話者 A** 私はこの映像、最初は何言ってるんだらう？っていうのが全然分からなくて。今回見た他の作品はカメラの向こうにいる、見ている私たちに話しかけたり、そもそもカメラマンさんがインタビュアーとして語り手と会話してることが多かったけど、『石と人』では撮られてる対象がカメラで撮られてるのを意識してないっていうか、ただひたすら日常を写してるなっていうのを感じて、震災の後に劇的じゃないけど、ちょっとずつお祭りだったり、今も伝統を続けてるよ

っていうのを語りかけたいのかなって、私は思いました。

**話者 B** あの巨石は、最初の方に映っていた幼少期の写真、記念写真みたいに、巨石であるがゆえに街の中のシンボリックな存在として、いろんな人の記録に残り続けていく。でっかくて重い自然物であるがゆえに、町とかその他の建物とかとは違って、震災でも流されずに、震災が終わった後もその場にあり続けて、だからこそ、ただ残ったものじゃなくて、地元の方にとってより一層、結束のシンボルであったし、震災前の思い出が残っている場所でもあるのかなって思いました。だから、この石が神楽みたいに復興とかそういうものの中心地になっていったんじゃないかなって。

**話者 C** 震災で周囲にはなんもなくなっちゃったけど、その石だけは残っているから、震災の歴史が現れるものになってるんだなって。で、その石を中心にしてお祭りやイベントが行われて、震災の記憶を残してるその石が、これからの復興のスタート地点、中心地点になっているんだな、と。

**話者 F** 「残していく」みたいなことを強く感じさせる映像で、「悲惨な過去を映す」といったコンセプトとは違う感じがあったなって。

**話者 E** 私は映像見る前にキャプションとか全然読んでなくて、ただポケーっと動画見てた時は、石とか全然何のことかわかんなくて、ただそこに住んでる人の日常が映し出されてるのかな、と。震災経験してない私たちはそこに住む人たちのことをあまり理解できないけど、別物とは思っちゃいけないみたいな、そういうことかなって思ったんですけど、授業で地域の人たちにとってその石の存在は、大切なよりどころであったって聞いて。そういうことって、外野の人たちにはわかんない。

お互いに話さないとわからないけど、話せるようになるには時間が必要だし、だからこそこういう記録があって、それについて話してくれる人がいて、私たちもその状況が理解できるのかなって思いました。

**話者 H** 私は、赤ちゃんを石の上で遊ばせてたシーンが印象的でした。他の作品で映っていたのは大人とかお年寄りとか、震災の前からそこに住んでた人が中心だったんですけど、『石と人』では震災の後に生まれた子供が映像の中に取り込まれて、それがずっと昔からある石との対比っぽいって感じました。

**話者 F** みんなの感想を聞いて、動画の中で埋め立てられちゃうみたいな話があったと思うんですけど、それを含めて

この動画ってどういう思いで撮られたのか聞いてみたいなって思いました。どう感じました？

**話者 B** 埋め立てられちゃうことに対する抵抗感っていうのもあると思うんですけど、やっぱり石の周りって震災から3年経った後でも草が生えっぱなしになっていたり、そんな中から自分たちが手がかりを見つけて復興しようとしていた中で、埋め立てることになってしまった。そういうことへの戸惑いとか憤りを表したり、自分たちがこういうふうに分たちで復興しようとしていってたんだっていう記録を残すために、巨石との記録を残そうとしたのかなって想像しました。

**話者 F** たしかに、明るい雰囲気だけど、明るいだけじゃないみたいなのはすごく感じました。埋め立てられちゃうっていうことに対する怒りかもしれないし、自分たちが復興して、これからこの土地で生きていこうっていう生命力みたいな。

## 「問い」をめぐる対話

**話者 F** 難しいな、「よりどころ」。どんなものだと思います？この質問見て、あんまり意識したことないなと思って。

**話者 E** 私が思いつくのは家族かな。

**話者 G** 私は「よりどころ」って聞いて、心情面のものが最初に頭に浮かんだ。そういう意味で自分がよりどころにしてるのは、友人ですね。基本一人が好きなので一人の時間を確保したいと思いつつ、やっぱり友達という時間も大切にしたい。狭く深くみたいな付き合い方をしてるので、大切にしている人はごくわずかなんですけど、その人たちとは、楽しいこともつらいことも共有したくなる。そういう意味で、すごくよりどころにしてるなって感じます。

**話者 F** たしかに。人をよりどころにしてるっていうのはありますよね。

**話者 B** 私はよりどころって、どれだけ他のものが変わっても変わらないものじゃないかなと思って。

一人暮らしを始めてから、しんどくなるとしょっちゅう実家に帰りたいて思うんです。だからその点では、家族が私にとってのよりどころなのかな。

私の実家、引っ越したんですよ。でも帰りたいたいの引越した先じゃなくて、引っ越し前にいた空間なんだよなって。やっぱり、人もあるけど、時とか空間とか全部合わせたものを、私はよりどころにしてたんだろなって。

**話者 F** ちょっとわかる気がします。自分が通ってた学校とか、昔住んでた家とか、近くを通ると気になりはするけど、「あ、今は違う人が住んでんだろな」って思うと何だか違う気になるし。

もう先生とかも変わって行って、自分が知らない人ばかりになってるって考えると違う場所に思えたりするから、人も場所も含めて空間みたいなものが、よりどころになったりす

るのかな。

**話者 A** 私にとってのよりどころは、精神安定剤的なものかもしれません。

私、ちょっと幼いんですけど、ブランケット症候群みたいなのを引きずってて、2歳から持ってる犬のぬいぐるみとタオルケットが大好きで、受験期とか不安な時は抱きしめたり、ぬいぐるみを肩に乗せつつ勉強してたり。それですごく精神が安定する。

親も大切なんですけど、自分の弱みを見せられない時があって。でも、物は何にも言わないし、ただひたすら私を受け入れてくれるから、そのぬいぐるみとかタオルケットを抱えて安心して、精神を安定させてたのかなって思いました。

**話者 F** わかります。私がよりどころを挙げるとしたら、自分の部屋のクローゼットの中。

**全員** (笑)

**話者 F** 私、実家暮らしなんですけど、部屋に鍵が付いてなくて、ドアが開けばなしになってたりとか、人の出入りがあったりすることが多くて。ベランダともつながってるから、ベランダに行くついでに誰かが通ったりみたいなこともあって。ウォークインクローゼットにちょっと入れるスペースがあるんですけど、絶対クローゼットの中は開けられることがないから、一人きりになれる空間みたいな。きっと、私は誰かに悩みを相談したりとか頻繁にしないタイプだから、一人でいられる空間みたいなのがよりどころになるのかなって思います。

**話者 C** 部屋の中の一部が、みたいなの、すごくわかりません。自分の部屋のベッドの上にクッション置いて、壁にもたれかかる時が一番幸せ、みたいな。

そういうのはたくさんあるけど、でも家族も思い浮かんで。家族は頼れるし安心するけど、私も全部を話すわけじゃないし、友達とかも頼れるけど、全てを明かすわけではない。でも、別に隠してることがあってもいいっていうか。全部ばらさなくても、話したいことを話せば、それでよりどころになるのかなっていうのは思いました。

**話者 D** 私、コミュニティに所属する意識的なものが自分の中で薄れてきてるって感じていて。というのも、自分がどのコミュニティに所属してるってというのが一つじゃないから。家族っていうコミュニティの一員でもあるし、大学のこの学科の一員でもあるし、サークルの一員でもあるし、いろんなコミュニティに所属してて、「自分にはこのコミュニティしかない」っていうのはないから。それぞれの所属意識によりどころがちょっとずつあるみたい。だからこそ、「こしかなない」みたいな強い所属意識がないんじゃないかって思いました。

**話者 F** たしかに。入ってるコミュニティごとに見られ方も違うし、自分の振る舞い方も違うし。でもそこに入ってることへの帰属意識はあるにはあって、でもその一つだけじゃな

いっていうのはすごくあるな。

**話者 H** 私の友達は SNS が一番落ち着くらしくて。全然知らない人とつながって、この人たちは自分のことは何も知らないから、受け入れてくれてすごい落ち着くし、安心するみたいなことを言ってて、その時はへえって思ったんですけど。全然知らない人に受け入れてもらうっていうのも、よりどころの一つなんじゃないかなって思いました。

**話者 F** 確かに、Twitter (現 X) とかで自分と親しい人だけでつながれるとか、近い意見を持つてる人とか、近い趣味持つてる人とかだけでつながれるみたいなのは、一つよりどころになるような気がします。

**話者 B** 私、さっき変わらないものがよりどころなんじゃないかって言いましたが、自分に対してネガティブなアクションをしないって、よりどころになる上でめっちゃ大事なんじゃないかなって。

家族に全部打ち明けるわけじゃないって話を聞いてて、家族でも他人だし、いつだって自分のこと受け入れてくれるわけではないと思って。

**話者 F** みんなが挙げたものに共通してるような気がしますね。絶対ネガティブな反応をしないと、絶対ネガティブなこと言わないとか。無意識に受け入れてもらえるとってるものみたいな。そういうものがよりどころになるんですかね。

でも、そう考えると、自分の置かれてる場所によってよりどころって変わるんだろうな。引っ越す前の実家だったりとか、やっぱり引っ越したからこそ、実家がよりどころだなんて思ったんだろうし。私は実家に住んでるから、自分の家がよりどころだなんて思うけど、いざ一人暮らしをしてみたら違うだろうし、実家ごと引っ越したらっていうのもまた違うだろうし。大学卒業して、社会人になって、交友関係が変わっていったら、よりどころにしてた友達とかも変わるだろうし。よりどころって言いつつも、変わるものなんだろうな。

**話者 G** コミュニティへの所属意識が薄れてきてるっておっしゃってたと思うんですけど、自分が年齢を重ねることで、自分の中の歴史みたいなものが積み重なって、所属している、もしくは所属していたコミュニティが蓄積されていく中で、途切れるものもあるし、複数持つことになるものもあるし。個人的な体験ですけど、大学生になってアルバイトをまず一つ始めて。その職場は学生の子が多くて、みんなワイワイしてて仲良し、まあ楽しんでたと思うんですけど、たまたま別のアルバイトも始めて。そしたら今度はそっちがすごく楽しくなって、自分の中での心情と実際にそれに割いてる時間が二つ目のバイトの方が大きくなったんです。

一つ目のバイト先はそこに所属している自分も肯定してくれるし、楽しいし、ある程度アイデンティティを構成してくれてたところだったんですけど、すごくよりどころにしてるかって言われると、正直そうでもないっていうか。そういう

のって変化していくと思うし、コミュニティへの所属意識とかも、年齢を重ねて経験値が増えるにつれて低くなっていくと、私も思います。

**話者 F** 所属意識とかで表した時のよりどころって、さっき言ってくれた「アイデンティティ」みたいなのが近いのかな。民族的なアイデンティティとか。日本にいと「民族」とかってあまり意識しないから、「地元」とかでもいいし、どっかの集団に所属しているとかでもいいし。一つ一つへの所属意識がそんなに強くないからこそ、それぞれを統合したアイデンティティみたいなものが、みんなの中にあるのかなって。そう考えるとアイデンティティがよりどころにもなるのかな。「こういうのを目指してるから頑張れる」とか、「こういう人たちに囲まれてるから自分もそうなりたい」と思うとか、頑張る理由みたいなものも近いのかなって思います。

**話者 G** 物をよりどころだと思ってる人もいれば、空間的なところに意味を見出している人も、人に対して思ってる人もいる。一定の基準を定めるっていうのは難しいけど、自分に対してネガティブなアクションが起こらないとか、絶対に自分を肯定してくれるって自分自身が思えるみたいなところは、たしかにそうだなって思いました。

**話者 F** あとは、推し活とかも近いのかなって思いました。“絶対推し”、自分のこと否定しないし、ただ癒してくれるみたいな。

**話者 C** 私も苦しい時にライブがあるから頑張ろうって思うし、心の面ではよりどころになってるかな。

**話者 G** 推し、誰かいます？

**話者 F** 私は「ああクリスマスライブ行くから頑張ろう」みたいな気持ちで。チケットが当たって、今週の土曜日ライブで。

**全員** おおー、楽しんで。

**話者 G** たしかに推しがいるからこそできた友達とかもいる。そういうところで言うと、実際に需要と供給があって、推しの側からしたら一方通行かもしれないけど、推しているこっちからすると、自分とその他のところにもいろいろと派生していくものはあるから。

たとえば、推しから見られるかもしれないから、ライブに行くまでにこの洋服を買うためにバイトを頑張ろうとか、どんどん広がっていくところはあって。その作用もあって、推しっていう存在はよりどころの一つの要素にはなるのかな。

**話者 A** 私もクリスマスライブにライブに行きます (笑)

**話者 E** イベントとかじゃなくても、夜寝る前とかに画像とか見ると癒される。

**話者 G** 意外とみんな、推し、いるんですね。

**話者 B** 推しに頑張れって言われたら、別に私に言ってるわけじゃないけど、私に言ってくれているかもしれないっていうその事実だけで救われる。

**全員** (笑)

**話者 A** 歌に「大丈夫」っていう歌詞が入ってて、受験期に

そこだけ聞いて「大丈夫、大丈夫」って言ってました。

**話者 C** たしかに一方的だからこそ、こちらの自由についているのはありますよね。

**話者 E** それこそ、いつ見ても変わらないっていう。

**話者 B** 絶対ネガティブな反応はしない。

**全員** たしかに、一方通行。

**話者 F** 画面の中で変わらないところもありつつ、推しが成長してるところを見て、推しが頑張ってるから、私も頑張ろうみたいな。

**話者 A** 全部楽しめますよね。全ての要素を楽しめる。やっぱり推しはよりどころですね。

**話者 E** よりどころって「よる」ところだから。「よられ」どころとかだと、また違ってくるのかな。向こうからの愛情とかだとしても、来るとちょっとプレッシャーになっちゃったりするから。やっぱり物とか無機物、推しとか、絶対こっちには反応はないから、そういうものがよりどころになるのかなって思いました。

**話者 B** さっきふと思ったのが、「よりどころ」と「依存」ってちょっと違うものかもしれないけど、全く切り離せないものではないよな、と。さっき言ったみたいに、よられるとプレッシャーを感じるし。だからこそ、コミュニティとかじゃなくて、空間、場所とか、物の方がよりどころになる人が多いのかなって思いました。

**話者 F** たしかに、依存と何が違うかって、あんまりわかんない。よりどころがあるのはポジティブに聞こえるけど、依存してるって言われたら、なんだかちょっとネガティブな感じがするし。

**話者 E** いい面と悪い面が見えてきちゃいますね。

**話者 F** 「それがあるから頑張れる」とかだったらよりどころなのかもしれないけど、「それじゃなきゃダメ」「それがないと生きていけない」みたいな、自分の生活みたいなのを犠牲にしてよりどころに頼ってるみたいなのは、ネガティブに映るのかなって思いました。

**話者 A** よりどころって複数あるんですけど、依存先って一本だから、それがなくなったらもうダメみたいな。よりどころはいっぱいあるから、一個なくなっても最悪どうにかなるみたいな感じなのかなって。

**話者 E** よく聞くのが、依存先を増やすことが自立になるっていうこと。

最初は、よりどころってすごい大事なものだと思ったので、一つじゃなきゃいけないのかなって思ってたんですけど、今いろんな話聞いてて、別に複数でもいいのかって。

**話者 F** むしろ複数の方がいいのかな。

**話者 B** もし何かがなくなっちゃった時のためのストックって言うと言い方悪いけど、そういう時のためによりどころはたくさんあった方がいい。

**話者 A** 『石と人』の中で、最初見た時は石がよりどころだっ

たのかなって思ったけど、こうやって話す中で、石を囲ってお祭りするとか、そういう交友関係も含めて、全部がよりどころだったのかなって思いました。

**話者 F** そんな気がします。埋め立てられちゃってバラバラになっちゃうからこそ、やってたのかなって。

でもそうなら、なんで神楽を作ったんだろう？ 誰が受け継いでいくんだろう、って思ったり。「新しい伝統」っていうけど。

**話者 B** 神楽っていう共通するものがあるっていう事実が、「あの時の神楽あったよね」って、形はないけど、人の記憶の中に残る故郷になる。

石がなくなって、共同体っていうよりどころもなくなっちゃうから、新しいよりどころとして、「もの」じゃなくて「こと」を作ったんじゃないかなって思いました。

**話者 F** 私、映像を見た時にはなんで神楽作っただろう、って思ったんですけど、そう言われてみるとたしかに、新しいよりどころにするために神楽があったのかなって納得しました。

**話者 E** 神楽をよりどころにするのもそうかもしれないし、神楽で出会った何かをよりどころにする、よりどころのきっかけを作ったみたいなのもあるかなって。

**話者 F** たしかに。そう考えると、埋め立てられちゃうことへの怒りとかだけじゃなかったのかな。だから楽しそうに見えたのかもしれない。

でも、「よりどころってどんなもの？」って言われた時の答えを、一つにしちゃダメなのかなって思いました。わかりやすく答えにできないのが、よりどころであるべきなのかなって。



# 『過去を見直して、今を見つめる』をめぐる対話

視聴した映像：『過去を見直して、今を見つめる』（制作：杉本健二）

## 問い： 震災の当事者とは？

**話者 B** この映像では仙台の大学に通っていた撮影者が、津波被害のあった石巻出身だった大学の友人の車に乗って、沿岸部のいろんなところをめぐりながら、ずっとビデオを回しています。

はじめのうちはその友人が普通っていた、津波で被災した大川小学校に行き、小学校時代はここでどんなことしたかといった話が進んでいく。その後、その友人のお家を訪ねるんですね。そこでは彼のお母さんが、大川小学校事故のご遺族の中でも、当日に何があったのか説明してほしいって訴えてる人たちと、もう諦めちゃった人たちがいるって話されていたのが印象的でした。

もう一つ印象に残ったのは、最後に車内で運転する友人と助手席の撮影者が、「子供たちにどうなってほしいか」みたいな会話をしている時に、友人のほうが「汚い大人になってほしくない」と語るシーン。彼のお母さんはあの日、大川小で娘さんに何があったのかを知りたいと思っていて、そういう小学校側や教育委員会の対応不足を訴えてる大人たちの前で、息子であるその友人は所在なさげだったから、わりとお母さんと温度差があるように私には見えてた。でもこの最後のシーンで、息子さんもお母さんのそこらへんの気持ちをちゃんと汲み取ってるというか、思うところがあるんだなって。

**話者 D** そう、あの場面、一瞬通り過ぎちゃうような場面で、突然ポロってつぶやいてて、私も「え……」みたいな感じでびっくりした。

**話者 F** えっと……撮影者の友人の方のご実家に行った時に、そのお父さんも教師をされてて、自分も当事者なのに、そういうことを市の教育委員会に訴えに行く気まずさ、みたいな話があって、東日本大震災の中では誰が加害者で、誰が被害者っていう明確な立場があるわけじゃなくて、そこに揺らぎというか、誰もが当事者であって、ある見方からは被害者だったり、別の見方からは加害者だったりする。震災をめぐるいろんな側面を全部いっしょくたにするんじゃなくて、自分はこの場面だとこういう立場だっていうことを明確にしなから向き合っていくことが、難しいけど必要なのかなっていうのが感想です。

**話者 E** たいいていは撮影者が撮影してるんですけど、ふとした時にその友人とか、友人のお母さんがカメラを回してる場面があって。

お母さんは結構強い方に見えたけど、お母さんがカメラを持っている時、亡くなっちゃった娘さんの写真を写しに行っ

たり、「ちょっと外行くか」って言って家の外を写したりしてて、やっぱりお母さんもカメラを持ったことでつらいことを思い出しちゃったのかな。

**話者 D** 私は当時小学校1年生で、父が大川小学校の話をしてくれて、「こういう時には自分が正しいって思った行動をとるんだよ」って言ったのが印象に残ってます。そういう逸話としては聞いてたけど、それが実際に起こった出来事なんだっていうのはズレがあった。でも、映像の中のふとした日常の場面で、「あ、この人たち当事者なんだ」と線がながったってというか、本当にあった出来事なんだって思われました。

**話者 B** 私も、さっき言ってた最後のシーンで、息子さんがちゃんと考えてるんだなって感じた。

あと、草っ原のシーンがわりと多かったじゃないですか。何も知らない私から見ると、ただの草っ原にしか見えないけど、でも「そこに家がいっぱいあったんだよ」とか、「この建物はこっだけ高くて……」みたいな話をされてて。この映像作品では、そこに住んでた人と、映像を撮ってる人、そして見てる人が一緒にいるからこそ、「あ、こんな草っ原になってしまうほど全部が流されてしまったんだ」とか、被害が大きかったことがわかる。そこが効果的だと思います。

**話者 E** 私も、自分には草っ原で広くてきれいだなっていうような感想しか浮かばないんだけど、そこに住んでた人はもとの景色を知ってるから、なくなっちゃったのを見たときに、やっぱり経験してる人と、してない人では違うんだなと。

**話者 A** 日和山の高台にも行ってましたね。

**話者 B** 高台から見下ろしてましたね。

**全員** （沈黙）

**話者 D** みんなは震災のこととか、大川小学校のこととか、どういう感じで聞いてたのかな？

**話者 B** 私は大川小学校のこと、今回初耳だったかもしれない。

**話者 E** 聞いたことはあるけど、私も詳しくは聞いたことなかったかな。

**話者 F** 私も初耳でした。

**話者 A** 最後に「将来、何を展望してますか？」みたいな質問をされた時に、あの息子さんが「街づくりを勉強してる」って話されてて。街がぐちゃぐちゃになって津波でなくなった様子を見たのに、それでも「街づくり」っていう未来を展望してる姿が、なんだろう……いい話にまともっちゃうみたいな感じもするんだけど、でもやっぱりその前向きな姿がすぐ

く印象的でした。

**話者 D** 皆さんはこの対話ワークショップで、なんでこの映像を選んだんですか？

**話者 E** 他のがわからなさすぎたから。

**話者 A** 私も、わかりやすかったから。象徴的というよりも、具体例として伝わりやすい映像なのかなって思いました。

**話者 D** 私は大川小学校を知ってたというか、ちっちゃい時の記憶なんですけど、すごく憤りを感じた事件で、決して近くはないけど、自分にも関連ある話題だったので印象に残っていて。教訓としてずっと頭にあるみたいな感覚でした。

**話者 E** 映像の中のお母さんのお話を聞いてると、食事の時とかはすごく明るい雰囲気なのに、いつもの明るさとは別のところで、学校の対応に対する怒りとか思ってるんだなって。やっぱり当事者の怒りの気持ちとかを、この映像で強く感じました。

**話者 B** あの日に小学校で何があったかを求める運動に疲れちゃった人もいる、みたいな話をお母さんがされて。ここ数年、#MeToo 運動とかめっちゃあったじゃないですか。別の授業で、その運動をやった女性たちがその後疲れちゃって、結局運動から離れちゃったり、自分が離れたくても他の人がいるから離れられないけど、でもやっぱり大々的に運動したらその後の社会復帰もしづらい、みたいなのを聞いて。そういう「疲れちゃった」っていう人たちに、関係のない私たちでも何かできることはないかなって思いました。

**話者 D** 忘れちゃった方が楽なんだろうな。「疲れた」って言って運動から離れた方が、見た目には震災から立ち直って前に進んでるように見えるから。

じゃあ「立ち直ること」と「諦める」ことって、何が違うんだろう？

**話者 F** 「立ち直る」というプロセスの中で、諦めることで折り合いをつけるみたいな考え方になって、そうしてるうちに結果的に諦めちゃったって人もいるんじゃないかな。

その活動をやめちゃった人も本当はやめたくなかったり、当事者として発信していきたくったけど、そういうつらいことを経験して、それでまた自分の中の気力やバイタリティみたいなものを維持したりするのはかなり難しい。

それは別に震災じゃなくても日常でもよくあることかもしれないけど、震災からの復興の中でっていうのがさらに難しくさせているかな、と感じました。

## 「問い」をめぐる対話

**話者 D** 時計回りで話します？ 出身とか、どこで震災を経験したかとか言ってもらえるとわかりやすいかも。

**話者 A** 私は東京出身で、震災経験としては揺れたなっていうのと、あとは自宅のお皿が落ちたくらい。揺れはしたけど、

被害はあまりなかったっていう感じです。

で、「当事者」とは誰をさすのか……。

私は高校生まで周りはずっと東京で育ってきた人ばかりだったから、気軽に「そういえばあの時何してた？」「あ、その時トイレにいてさ」みたいな感じで話してたんですけど。被害をもっともっと受けている人について情報では知ってたけど、今回こういう長い映像を見るのが初めてだったので、本当に被害を受けた方の心の内とかがよく伝わってきました。もちろん被害を受けた方が当事者だし、あと被害を受けた、受けながら今でも闘ってる人、闘えなくなっちゃった人。ちょっと何言ってるかわかんなくなっちゃったけど、うーん、その場で経験した人と……。またあとでもう一度話してもいいですか。

**話者 B** 私は神奈川県出身で、私も同じく「揺れたな」ぐらいで、特にそれ以外の被害はこうむってなくて。自分は震災の当事者ではないと思ってるから、「当事者」というのは直接的に大きな被害を、その後の生活に支障をきたすぐらいの大きな被害を受けた方々を指すのかなって思いました。

**話者 C** 私は石川県出身で距離的に結構離れてるんで、あまり揺れを感じませんでした。3月11日に震災が起きて、その2ヶ月後のゴールデンウィークに宮城県の被災地の、なにもない海の近くにも行ったことがあって、それを見た時に、「あ、これはほんとに起きたことなんだな」って実感した記憶はあります。でも結局、その場を見て震災を目にしたけれど、震災の被災者には当たらない。直接的には被災者には当たらないけど、もし、自分の大切な人が被害に遭って自分もまた苦しんでるとしたら「当事者」になるのかなとか、直接的な被害はないけど苦しんでる人がいたら、それは「当事者」に当たるのかなって思いました。

**話者 D** 私は群馬出身で、揺れた時も小学校の帰りの会の途中で、「あ、地震ってこんなに揺れるんだ！」って考えながら家に帰って、その後何回か揺れがあった時もちっちゃかった弟を守りながら机の下にいたのを思い出して。

映像見るまでは「自分は当事者じゃない、津波の被害を受けた人が当事者だ」って思ってたんですけど、この映像を見ている中で自分の当時の心境が思い出されて、「自分も地震にあって、お家に帰ってからもものすごい津波の映像をずっと、延々とテレビで見ててすごく怖かったな」とか、「計画停電とかもいろいろあったな」とか思い返されて、自分が当事者じゃないとは言えなくなっちゃったなって思いました。

もちろん、ほんとの被害を受けた人とは全然立場が違うし、その映像を見てつらくなったとかっていうことも、安易に共感してるんじゃないかっていうふうに反省することではあるんですけど、自分もやっぱりつらいことはあったんだろうなって。

自認に頼るしかないっていうか。広い意味、一般的に使われる意味だと、津波の被害を受けた方々が「震災の当事者」と

なるんだろうけど、その映像ですごくショックを受けたとかいろいろな方がいるので、自分が「当事者」だって思ったらどうでしょうか。ざっくりとした結論ですけど。

**話者 E** 私は当時保育園の年長さんで、東京出身なんですけど、偶然海外旅行でグアムに行ってたから揺れは経験しなくて。ただ、ホテルに帰ったらテレビでひたすら津波の映像が流れてて、その後1週間ぐらい日本に飛行機が飛ばなかった影響で帰れなくて。その後は結局おばあちゃんの家に預けられて、テレビの AC ジャパンの広告もあんまり見なかったので、自分からしたらすごい遠い出来事みたいな感じで、自分は絶対に当事者じゃないっていう気持ちでいるんです。で、たぶん、今回の映像の撮影者の方も、自分では当事者とは思ってないんじゃないかなと思って。やっぱり被害を受けた方とか、住宅が壊れちゃった人とか、家族や友達が被災しちゃった人が当事者っていうのかな。でも今皆さんの話を聞いて、震災の影響を受けてその後の生活に何か響いちゃった人たち、精神的にも身体的にも、その他の生活になんらかの影響があった人たちのことを「当事者」って言うっていいのかなって思い直しました。

**話者 F** 私は北海道出身で、当時は小学4年生で、先生が「地震が来た！机とか椅子の下に隠れて！」って言って。北海道だったので地震はそこまでは大きくなかったけど、自分の中でこの「当事者」っていうのを考えた時に、あんまりその……震災と距離があったっていうのもあって、すごく曖昧というか、ふわっとした考え方なんですけど、東北に住んでる人はみんな「当事者」っていうイメージが勝手にあって。でも、この授業とかで学んでいく中で、そういう安易な括り方っていうのは失礼だったり、あるいは冒涇だったりするのかなって。率直な自分の考えとしてはそうだったっていうのを踏まえた上で、「当事者」はそれぞれの自認によるものだったり、あるいは被害を受けた方だったり、様々な定義ができると感じました。

**話者 A** あ、もう一度いいですか？皆さんの話を聞いて、自認によるものとも思ったんですけど、映像の中であのお母さんが、「うちは妹が死んだだけだから」「もっと向こうの地域には家も家族もみんななくなっちゃった人々もいるし」みたいなこと言って、「うちは〇〇だけだから」っていう言葉がすごい印象に残っていて。傍から見たらご家族が亡くなってって絶対すごい被害者じゃないですか。なのに、被害が少ないみたいな言い方をされていたので、自認でも全然違うものなんだなって。でも、それを踏まえた上でも、やはり「当事者」って言うと、なんだろう、その被害を受けた方みんなだって思いました。その自認にグラデーションはあると言えるけど。

**話者 F** 今、社会保障について学んでいて、たとえば行政が誰かを支援するときに、ある程度対象を定めないと支援でき

なくて、自認に拠るとかではなく、こういう人たちが支援の対象にあたるって判断して支援物資を届けたりする。そういう行政から見たかなり恣意的な判断としての「当事者」っていうのもあるのかなって思いました。

**話者 E** たしかに。でも、そこを定めないと効果的に支援ができない。

**話者 F** それが本当に必要なニーズとして求められているものかどうかに関わらず、たとえば支援物資を押しつけてしまおうとか、行政が必要だと思ってたものが、そこでいう当事者からしたら全然いらぬものだったっていう問題だったり。それって、「当事者」っていう言葉の揺らぎからくる問題なのかもしれない。

**話者 B** そう考えると、「当事者」という言葉自体がいろいろなものを含んじゃうから、家を壊された当事者がいたり、その場にはいなかったけど精神的な被害を被った当事者もいたり、「当事者」がそもそもグラデーションであるなら、分類が難しくて微妙ですね……。

**話者 D** どういう時に「震災の当事者」って言うってわけ？津波の被害に遭った方とか、他のいろんな具体的な言い方がある中で、いつ「震災の当事者」って言うってのかな？

**話者 E** 被害を受けた方たち自身が、「当事者側からしたら云々……」みたいに使ってた記憶があります。

**話者 F** あと海外の人から見たら、日本人全員当事者に見えるのかなって。でも実は北海道出身だったり、石川県出身だったり、別の場所にいたら当事者とは言えなかったりっていうのも、どこから見るとによって全然違うんだろうなって思ったので、たとえばメディアテークにいらっしゃる方でも、海外から来た方から見たら「当事者」かもしれない。ご自身たちが思う「当事者」とは別に、日本人だから当事者みたいな考え方もできるかなと。やっぱり「当事者」がグラデーションであるなら揺らぎが存在する。

**話者 E** 逆に言うと、行政から支援をしなきゃいけない当事者は家をなくしたり物資がない人たちで、心の支援をしなきゃいけない当事者は精神的に傷つけられちゃったりする可能性があるんで、支援したい側からの定義によっても違うかもしれない。

**話者 D** 外の人たちが「あなたたち当事者」っていう枠組みを押しつけると、そこが本人たちの意思とズレがあったりする。言葉って難しい。

**話者 B** 自分で言うのも難しいですね。「私は震災の当事者です」って、なんか難しい。

**全員** うん……。

**話者 B** 外から言うのも難しいけど。

**話者 F** 言葉尻の問題かもしれないですけど、たとえば「自分が当事者です」って名乗ったりすること自体が責任だったり覚悟が必要に思えてしまう。そう言うことによって、言わなかったら背負わなくてもよかったものを背負ってしまうと

か、そういうことを考えてしまってなかなか言えなかったりとか。あとは、震災という経験を避けたりそこから離れたりすることで忘れようとする気持ちが、「自分は当事者っていう言葉から遠い存在なんだって思いたい」と思わせたりとか、そういう面も考えないといけないのかな。少なくとも他人が「あなたは当事者です」っていうのは難しいし、他人が決めることではないかな。

**話者 E** 私はさっき、被害者自身が「当事者からしたら」って言ってた気がするって言ったんですけど、むしろ他の人が被害を受けた人たちの気持ちを代弁する形で、「当事者側からしたらこうだと思うんです」とか、「当事者側からしたら今の政府の対応は悪いんじゃないか」とか、そんなふうに代弁する形で使われてたかもしれない。

**話者 F** 「代弁する」っていうのも、実際にほんとにそこに「当事者」と呼ばれる人たちの意思ののっかってるのか分からないことだったりして。

**話者 E** 勝手に言ってるだけっていうこともある。

**話者 F** 発言が暴力性をはらんでるっていう難しさもありますね。

**話者 B** 代弁する人もどこかしらの立場からものを言ってるって考えると、その人も当事者だし。

**話者 D** なんか、お互いにお互いを定義しあって、結局誰もいない空集合みたいな？

**話者 F** 社会学とかの用語で「想像の共同体」っていう言葉があるけど、みんなが「当事者」だと思ってる存在がいて、でもその実体っていうのは明確に定義されてるわけではない、みたいな。だから、みんなの頭の中にそれぞれ「当事者」っていうのがあって、それを共有して「当事者」像ができてるだけで、そこに実体がないと言うと語弊があるかもしれないけど、それぞれのものを掛け合わせた「当事者」像がある。それはかなり曖昧なもので、みんなの中で一致している、かぎっこ付きの「当事者」っていうイメージを共有するのは難しいって思ってしまう。

だから議論する中でも、実際に「当事者」だと相手か思ってる当事者とイメージが違ったら意見が食い違っているっていうことが生じたりして、この問い自体がかなり難しいというか、自分の中ではこれは消化できないものになって。

**話者 D** 「当事者」って、中身をそれほどしっかりと定義しなくても、保留しておける言葉ですよ。たとえば映像の感想を言う時とかに、結構簡単に使える言葉。

**話者 B** たしかに、「当事者」っていう言葉を使った時点で「自分は当事者じゃないけどね」、みたいな気持ちを含んじゅうから安易には使えないですね。

**全員** うん。

**話者 E** しかも、交通事故の当事者とかじゃなくて、震災のっていうのが、特に曖昧さを増してる感じがする。法律でパキッと決められた、こういう犯罪の被害者、当事者ですよ。

て言われたら、まあそうかもねってなる可能性はありますけど。震災ってほんとに曖昧ないろんな当事者を含んじゅうから。

**話者 F** 「自分のところは妹が亡くなっただけだから」っていうのが、自分よりもひどい被害を受けた人がいるのを前提とするように聞こえるとすると、自分から見て、東北の人だったり、福島とかひどい被害を受けた地域の人たちは「当事者」って思っても、その人たちはさらに自分より大きな被害を受けた人を「当事者」だと思ってる……って、なんか順ぐり順ぐりのループみたいな。だから結局、「当事者」っていうのが、いい悪いは別として、「誰かから見た自分よりも大きな被害を受けた人」という言い方ができる側面もある。

**話者 B** 私も相馬高校の演劇「今伝えたいこと（仮）」（註：震災後に福島県立相馬高校の生徒たちが制作した演劇作品）で出てきた、おさげ髪の女の子がめっちゃ当事者だと思って。津波で家もなくして、家族も亡くして、その後も預けられた先で親戚にいじめられちゃって、クラスの生徒たちとも折り合いが悪くなって、最終的に自殺しちゃうというのが、みんなの想像する架空の当事者の詰めあわせみたいだな。でも顧問の先生が、その役のような生徒は実際にはいなくて、いろんな生徒の体験やニュースで見た被災者のケースを組み合わせた役柄だっておっしゃっていて、もしかしたらあれが「当事者」の一つの例なのかもしれないって思いました。

**話者 F** あの演劇が、そういったステレオタイプに対する警鐘だったりする可能性もあるって、今話を聞いていて気づきました。

**話者 E** 映像の中に出てきた大川小のご遺族であるお母さんが、自分のことを「当事者」と思ってたかっていうのを知りたいって思う。あのお母さん、「むしろ自分より被害が大きい家がある。うちは妹が死んじゅうただけだから」って話されてたけど、実際娘さんがなくなってるわけだし、それで自分から「当事者」だかって言うのか、それとも外から「当事者」だかって言われた時に反発を覚えるのか、そこを知らないとなんとも言えない。

**話者 B** もしかしたら、そのお母さんは「大川小学校事故の当事者」っていう意識があるから、学校や教育委員会に「ちゃんと説明してください」って訴える活動をしてるのかも。

**話者 E** たしかに、少なくとも小学校の中で不適切な対応を受けた保護者、被害を受けた子の親として、「当事者」だから伝える活動をしている。

**話者 D** 「震災の当事者」っていう時と、交通事故の被害者、当事者って、似ているようでいて、ちょっとイメージが違う言葉な気がしません？

**話者 B** 私は「当事者」って聞くと、「加害者」というのが強く出てくる。「事故の当事者」というと、やった人とやられた人。

**話者 D** すごいわかる！

**話者 B** でも、震災における加害者って誰？

今、ふと思ったんですけど、震災の加害者がはっきりしていれば、「これをした人」っていうのに合わせて「これをされた人」っていう被害者がいて、その人たちが「当事者」になるけど、加害者がいないから被害者の範囲がどんどん広がったり縮まったり、確定できないのかもしれない。

**話者 F** 「当事者とは？」と問われないと、自分は「当事者」って誰なのかを考えることがなかったと思うので、この質問に対して誰かって答えを明確に出すというよりは、「誰なのか？」って考えるこのプロセスこそ重要なのかなって思いました。

あとさっき、自分は「当事者」には揺らぎがあるって言ってしまったんですけど、そうやって終わらせてしまうのではなくて、まずは具体的なケースをもとに、こういった対話の中で問いの答えを探したり試行錯誤しながら、「加害者」「被害者」っていう二元的な考えだけでなく、色んな視点から考えていく必要があると思いました。

**全員** （頷く）

**話者 D** 答えは……ない。

**話者 E** あと、対話することによって反省が出てきますよね。個人的には、何も考えずに「当事者」って使っちゃってるなって、反省してます。



## 『参佰拾壹歩の道奥経抄』をめぐる対話

視聴した映像：『参佰拾壹歩の道奥経抄』（制作：宙崎抽太郎）

### 問い：“弔う”ってどういうことでしょうか？

**話者 D** この映像を見て、淡々としたお経がずっと続いていたので、「これは何だろう？」と不思議な気持ちになりました。あと印象に残ったのは、波が来た小学校が映っていたこと。去年、この荒浜小に行ったことがあって、映像では窓ガラスも割れてたりしてましたが、私が行った時は震災遺構になった後で、記念館みたいにすでに整備された感じだったんですね。なので、映像で見る荒浜小の姿と私の記憶の中の姿が違くなって感じました。

わすれん！のサイトの映像紹介では、制作者の宙崎さんが何でこのお経にしたかについて、「自分の肉体で感じたい」とか、「言葉にできない」と書かれてましたが、それを自分の荒浜小の記憶と重ねて「あー、すごい分かるな」とか、映像で伝わるものもあるけど、やっぱり行くことで伝わることもあるなと感じました。

**話者 E** 宙崎さんが震災で被害を受けた地域を歩いて何を思ったのかは、「脱臼語」（註：宙崎氏による造語）なので分からなかった。というよりはむしろ、思ったことを彼自身が伏せているという方が正しいような気もしました。

震災当時に故郷から離れていたという、当事者とも非当事者とも言いがたい曖昧な立ち位置であることから、アウトプットしてマイナスな感情を吐き出したっていう気持ちはある。だけど、何を発言するにも角が立ちちゃったり、許されないような気がしてしまったりというところに共感しました。彼のお経は自分なりの奉納であって、祀りであるということですが、お経を聞いていて、震災の犠牲となってしまった方々への慰霊の意味もあると思いました。

もう一つ、阪神淡路大震災と東日本大震災の違いがスマホの浸透による情報量の増加であるという宙崎さんのお話を聞いてハッとしました。今まで私はそういう点にあまり目を向けてこなかったけれど、確実にそういうことによる被害とか、心の傷を受けた方々って、今も大勢いるんじゃないかなと思うので、今後関心をもって生きていかなければならないと思いました。

**話者 F** 私の一番印象に残ったのもやはり、阪神淡路大震災と東日本大震災を比較して異なる点があるということでした。東日本大震災はスマホが普及したので、震災に関する情報が多くなったという話だったんですけど、今もたとえば、ウクライナの戦争や中東あたりの悲惨なニュースの映像を見ることによって、心身に影響が出てしまう方もいると思います。そういうニュースを見て、自分なりの考えを持ったり、誰か

の立場になってみたりっていうのは大切なことではあるけど、ときにはニュースはニュース、という一歩引いた目で見てみるのも必要なのかなって。

宙崎さんは、情報の波があっても、タイムラグが生じてもいいから、自分の目で震災の跡を見たかったと語っていらしたんですけど、映像は震災の悲惨さとかを効果的に見せてくれるけど、そのぶん伝えられることには限りがあるとも思いました。

**話者 G** 映像の中で「自分にペクトルを向けて作られた」というお話があったのが、すごく印象に残ってます。

というのも、震災って膨大な数の悲しみや痛みを生み出すけど、それが膨大な数すぎるとその中で序列化が起こってしまって、「自分は娘を亡くしただけ」とか「母親亡くしただけ」とか、本当はすごくつらいはずのことを「だけ」で済ましてしまう事態が起こるんだらうなって。

宙崎さんにとっては、自分の痛みとか悲しみが実感できない痛みだったことが大きかったんじゃないか。実感できれば悲しみとか涙とかで自分の中から吐き出せるけど、そうできないと、実感ができないのに現実が起こってしまっているっていう情報の錯誤に追い詰められてしまう。それがすごく苦しかったんじゃないかと思いました。

**話者 H** 私は映像を見て、この人が紡ぐ言葉がすごい好きになって、とつても誠実な自己表現をする人だなって、シンプルに思いました。かつ、私自身が考えていることをそのまま口にしてくれた人だなと。

私は福島県出身で、小さい頃から原発事故とか震災が近くにあったんですけど、それが当たり前すぎて、改めて考えたのが2020、2021年とか、10年ほど経ってからだったんですね。それをまさに宙崎さんがこの動画の中で、「たとえ、大遅刻であっても触れておきたかった」って言葉で表してくださって。今まで言葉に表してなかった複雑な感情を、ナレーションの部分で宙崎さんがすごく素敵な言葉でまとめてくださったのが心に残りました。

ただ一方で宙崎さんの言葉から、自分自身がサバイバーであることへの罪悪感みたいなものも感じて、宙崎さんつらいだろうなって、この動画を作った後に生きてくのが絶対つらいんじゃないかなって、共感しました。

**話者 A** 私は最初見た時は、ナレーションが始まる前の部分では何がどういう風に、何のために動画を撮っているかわからなかった。ナレーションや説明を読んだり聞いたりして、この動画がおそらく誰かに見せるためじゃなくて、自分のた

めに作成した動画なんだろうっていうのがわかり始めました。悲しみを人前では表現しにくい震災という状況に対して、宙崎さんはこういう形でアウトプットしているんだと感じた一方で、私自身は撮影者の感情をアウトプットする目的で動画を撮影したり、何か記録を残したことがないなって思って。私は動画を撮るんだったらきれいな景色を撮るとか、その場で起こっていることを撮ることが多いから、すごく新鮮に感じました。

あと、非当事者といえる私が動画を見て、勝手に責められている気持ちになって、当事者でないことに罪悪感も覚えました。

**話者 B** 私も全部通して見て、よく分からないって思ったのが率直な感想です。脱白語っていうのもあるし、感情をアウトプットするために撮るってところが、本当に想像がつかないというか。どんな気持ちで撮っていたのかを考えたいなと思って、この班に来たっていうのもあります。

当事者であり非当事者でもあるというお話を聞いて、じゃあどこまでが当事者で、どこからが非当事者なんだろうって、自分自身も考えないといけないと感じました。

**話者 C** 私はこの動画を見た時に、何をしているのかなってところから入ったんですけど、言葉がわからなかったぶん、かえって映された景色に目がいって、とても生々しく感じられました。浴槽だけが残っている草むらだったりする景色が印象的。

あと、この作品は距離感が絶妙だなとも、また今日の時代ならではの SNS の距離感についても考えさせられました。

私は震災当時は小学 1 年生で当事者でもなかったけど、当時テレビの映像だけでもとても怖くて、ずっと暗い気分になっていた程度ではあるんですが、その距離感、現地との圧倒的な隔絶みたいなもの、当事者では無いと思っているところからして、宙崎さんと同様の距離感を感じていました。

あとはその「近いのに遠い」という距離が言語化できない、そういう言葉との距離とか、時間という距離とか、すごくピッタリと噛み合っている、テーマに噛み合ったような距離のとり方だと感じて、これ以上ない形式なんじゃないかと、最終的には思いました。

**話者 E** 私は、感情のアウトプットのために動画を撮るという宙崎さんのお気持ちを聞いて、「あ！私と全く一緒だ」と思いました。

(数名から驚きの声)

**話者 E** だから、さっき他の方がそれが新鮮だって話されていたのが、「え！そうなんだ」って思って。今までそういうことを自分以外の人に確認したことがなかったので、みんなもそうだと思っていたんですけど、これって、自分のアイデンティティだったのか！って気づきました。

**話者 D** え、どういう時にそれをしているんですか？

**話者 E** うーん……マイナスな感情とか怒りの感情をもった時に、どうしてもこれをもとにして何か作りたいって気持ち

が湧くことがあって。でも形に残すのがあまり上手ではないから、残したいのにうまく残せないっていう食い違いが悩みの種になったりして増田。

**話者 C** 私も負の感情を抱いた時にアウトプットするっていうのが、個人的には共感できました。すごく嫌なことだったりつらいことがあった時に、何らかの形に落とし込む。それは物事を語るのとは全く違う形で、しかもそれが起こっているとかそういうことがわからないような形で残すんですけど、宙崎さんの作品のそういう感じ、脱白語の形をとったところとかが共感できたというか。自分の技量とのズレということと話されていて、私自身もそれを痛感しているの、作り手として尊敬の念を抱きました。

**話者 A** 私はマイナスの感情を抱いた時に言語化しちゃうと、余計つらくなっちゃうタイプ。だから、自分の負の感情と向き合うことからいつも逃げてるのかなと、思いました。

**話者 H** 私も言霊とかを信じてるタイプで、嫌なこととかを口に出しちゃうと、本当にあったと断定されちゃう、かつ人に向かって表現したり人に相談したりすると、さらにそれが、形として残っちゃうような気がして、あんまり言わなかった。でも震災に関しては、実は高校時代、すごく長い時間をかけて宙崎さんみたいに表現活動をしていたことがあって、その時は生みの苦しみがすごく……表現の痛みというか。

**話者 G** 私の場合は、嫌なこととか苦しんだこととかあった時は、メモ機能に全部バーって打ち込むか、あとは寝るかっていう二択で。書き起こすと客観視できて、相手の立場になって考えられたり、逆に自分は今どういう状況に置かれて、なんで自分はこんなに悲しい気持ちになったんだろうっていうのがわかるから。それは自分の中で、「自分事じゃないこと」として片付けられる方法でもあって。

でも逆に、それが本当に現実にあったとか、客観視することで現実化してしまうのかなって思うと、表現によって痛みが増加するか緩和するかに分かれるのは納得できると思いました。

**話者 D** 宙崎さんや他の皆さんみたいに、嫌なことがあったときに表現したり言語化したりして、そのことに向き合うっていう方法をとっていらっしゃる方がいるのに対して、私はどちらかという現実逃避することとっちゃいがちなので、ちゃんと向き合うという選択をされているのがすごいと思えました。

## 「問い」をめぐる対話

**話者 D** 「弔う」って、すごい重いテーマだと思うんですけど……。

**全員** (沈黙)

**話者 D** 「弔う」って、亡くなった人にしか使わないですよ。

私がぱっと思ったのは、「考え続ける」とかかな。

**話者 G** 私は「弔う」って「成仏することを助ける」っていうイメージだと思っていて、「自分の感情を弔う」だったら、自分の中で、自分がどうやったらこの状況を乗り切れるのかっていうのと向き合って、たとえば映像の制作者だったら映像に表すっていうのが、「弔う」の形だと思いました。

**話者 H** 私は、「弔う」を「飼いならすこと」だと思っていて、自分の苦しさとか悲しさとかっていう感情を、消化するっていうより、飼いならすことができる状態なんじゃないかと思えます。

**話者 E** 亡くなった人に使うときの「弔う」は、たとえば「何回忌」とかで何かを残しておく、その人のかけらを心の中に残しておくみたいなイメージが強い。

**話者 D** 「忘れない」みたいな感じですかね。

**話者 A** 私は「考え続ける」がいちばん近いと思ってます。人生であまり近い人を亡くした経験がなくて、震災とかどこか遠くで起きてることによって亡くなった方々に対してしか、「弔う」っていう感情を抱いたことがなくて。そうすると、その事故の原因を理解するとか、その事故の存在を記憶しておくみたいところで、自分の理解というか、「弔う」という感情が止まってしまっていて。自分の感情が「弔う」という言葉に対してまだ乗り切っていないというか……。

**話者 B** 私は、「無かったことにしない」ことなのかなと思っていて、たとえば誰かを亡くした時にその人がいなかったことにしない、いたことを自分の中でとっておくみたいな部分があると思うし、震災みたいな出来事に関しても、それが起きたことを風化させていかないというところで、「弔う」という使い方ができるのかなと。

**話者 C** 「弔う」って、亡くなった人についてはどうしても一方的になってしまう。「亡くなった方々のために弔う」と言っても、相手の意見を聞くこととか、何をしてほしいかは想像するしかないし、そもそも想像すること自体が少し傲慢なのかもしれないと思う。一方的である、というのをふまえた上で、自分たちの中に存在するその人たちを「弔う」という面を無視することはできない。

「飼いならす」ということには、その人たちがいたということのを忘れないでいるっていう面と、とはいえ自分たちは今後生きていかなくてもいけないということの矛盾する両面がある。常に忘れられないと思いつけることはなくても、いつでも思い出することができるように、相反することを抱え続けることが、弔うことなのかな、と思います。

**話者 H** 「弔う」っていう言葉の一部には、「諦める」という言葉が含まれていて、「弔えない」は「諦められない」と少し近い気がするんですね。

「弔う」っていう言葉は、ある人にとっては美しい言葉でもなんでもなくて、たとえば震災から12年経っても亡くなった娘さんの骨を毎朝探している人がいたとして、その人は

ずっと娘の死を諦められない、受け入れられない状態だというのが、「弔えない」という言葉につながっているような気がします。

**話者 F** 「弔う」についてこれまで考えたことがなかったんですけど、皆さんの話を聞いていて、それは亡くなってしまった方に向けての言葉であると同時に、残された人がその人の死を受け入れることなのかな、と。。さっきの「諦める」という言葉を聞いて、受け入れるっていうのは、その人が死んでいて諦める、っていうことなんだと思いました。

**全員** (沈黙)

**話者 A** 私、実感できてないこともあって、自分が「弔う」っていう言葉をきれいな言葉として捉えていたと気づきました。

**話者 D** たしかに、「弔う」ってすぐには思えないというか、宙崎さんのように振り返って、過去の現実として受け入れてからじゃないと、って思いました。

**話者 H** とは言いつつも、「弔う」って美しくもあると思っていて、なぜかという、「弔う」って当事者と非当事者をつなげるものでもあるから。たとえば、震災を実感することって、非当事者にとっては難しいことだけど、弔うことならできると思うんです。3.11になったら日本全国みんなが弔うことができるっていうのは、ある意味で救いだと思っていて、みんなが弔うことができる、人と人をつなげるという意味では、すごくいい言葉だなと思います。

**話者 A** いいこと言う！

**話者 G** 話を聞いているうちに、最初は「弔う」って、亡くなった人のためにあることだと思ってたけれど、残された者のためにある言葉だとも思うようになりました。振り返ってみると、たしかに私も祖母を亡くした時、葬式の最中とかに、おばあちゃんのために頑張って言葉を言おうとか、お棺に物を入れようって思ったけど、それって自分の中で、おばあちゃんに最後にこれしてあげたい、あれしてあげたい、そうすることで自分の気持ちを整理したい、っていう気持ちがあって。だから、自分の中ではおばあちゃんのことを弔ってたつもりでいたけど、それによって自分が救われたんだなど。弔うことが残された者の救いになるって聞いて、そのことを思い出しました。

**話者 E** そもそも、人間っていうのは他者との関わりの中に生きている存在だから、他者の中に生きているって常に思っていて。結局、自分が死んじゃったら、自分には何も残らないけれど、他者の中には残り続ける。だから「弔う」っていうのは、他者の中に生きている自分を確認してもらおう作業だと思いました。

**話者 D** そう考えると、やっぱり宙崎さんにとっては、あのお経も弔う行為なのかな。「お経」とか「まわる」というのを通じて、亡くなった人のための慰霊でもありつつ、自分が行けなかったことへの整理という面もあるのかもしれない。

**全員** (長い沈黙)

**話者 D** さっきの当事者と非当事者の話が興味深かったんですけど、当事者と非当事者で弔い方に違いがあるのか、それとも同じというか、逆に関係なく人それぞれなのか、どなたか意見ありますか？

**話者 A** 非当事者が弔うことって簡単というか、あまり重い覚悟というものがなくともできるのではないかなと、皆さんの話を聞いて思いました。

**話者 E** 結構センシティブな話になっちゃうんですけど、たとえば交通事故で亡くなった方がいて、その事故現場の近くにはたくさんのお花やお供え物が置いてあったり、その事故に遭った方のことは全く知らないけど手を合わせてる方がいらっしやる。そういうのを見るたびに、「弔い」ってどういう関係性のうちに築かれるものなんだろうと思って。関係が希薄な中で「弔い」って、どういう意味合いを持つんでしょう？震災だと規模が大きすぎるからか、そういうのはあまり感じないけど、事故での弔いってなんか難しいなって。無責任な弔いになっちゃうのかとか、思ったりします。

**話者 H** そういう時の「弔い」は、感情で人が動くような気がする。直接その人を知らなくても「かわいそう」みたいな感情でその人を弔うことは可能……そう考えると、逆にすごく残酷なことだけど、弔うに値しないような人っていうのもたぶんこの世にいると見なされているんじゃないかって。たとえば、自爆テロで死んだ人とか、犯罪を犯しながら死んだ人って、死んだこと自体は交通事故で亡くなった方と変わらないのに、弔われない人生、弔われないタイプにカテゴライズされてしまう……。「弔う」という言葉って、自由で普遍的でみんなできるし、されるものだと思っていたけれど、実はすごく限定的な言葉、行為なのかもしれない。

**話者 A** 「自分自身を弔う」ってできると思います？

**話者 G** 自分自身か……。

**話者 A** 「他者からは弔われない」とされている人にとって、最期に弔うのは自分だけかなって思うと、それって果たしてできるのかな？

**話者 G** 他の人から弔われないっていうのは、その人を弔ってしまうと、その人によって命を落とした人たちを弔えなくなってしまうことへとつながるから、弔われないのかも。

**話者 E** 「弔う」の範囲は本来広いはずなのに、かえって限定的になっちゃう矛盾があるんですかね。

**話者 H** やっぱり倫理観とかに関わってくるのかな……。

**話者 C** さっき、「受け入れる」とか「諦める」「諦められない」という話があったけど、関係が遠くなればなるほど「受け入れる」という過程がうすくなるというか、そうする必要がなくなってしまうというか。

関係が希薄な中で、自らが弔おうとする感情が生まれるときに、同情が憐みみたいなものにすり替わるのが、私はすごく怖い。それは一方的で傲慢なことだから、そこをどのようにして当事者に寄り添う形にできるのかというのが、感情がと

ても利己的なものであるがゆえに難しいなと思う。

**話者 G** たとえば事故とかでは、メディアの発信の仕方でも変わるのかな。亡くなった方単体で見ると、その人が亡くなったことをかわいそうだと感じると思うんです。

でも、もし亡くなった子のお母さんがいて、お父さんもいて……みたいな時には、子どもを持つ親って絶対つらい状況だから、そのニュースを見た人は、残された親の方の感情に寄り添う時間をもつこともあり得る。だから、どういう風にその状況を伝えられたかによって、「弔う」っていう言葉のあり方も左右されるのかなって思いました。

**全員** (沈黙)

**話者 A** 同情することで自分の中に生まれる負の感情とか、かわいそうっていう感情を向けることが傲慢なことはよくわかる。でも一方で、感情を向ける先が「弔う」っていう形でなかったとしたら、それはそれでかなりしんどいなって思うから、「弔う」の範囲を絞らない、関係者を絞らない形をとることこそが「弔う」の価値だとも思うんですが……。

**話者 D** 3.11については、今も毎年テレビで中継して黙祷とかするけど、そのときに自分がどういう感情で黙祷しているかな、と思って。たしかに「かわいそう」とか、同情的な感情もあると思うんですけど、そういう風に「弔う」っていう行為が広く行なわれることで、毎回思い出させるとか、知らない世代も知るきっかけになるという面もある。ここまでは個人が弔う話をしてきたけど、そういう何周年のように広く行なうことは意味があることだと思いました。

**話者 G** 戦争や震災、事故の話とかを聞いた時に、自分の中で自分の感情を介してしまうことが申し訳ないように感じてしまうのが、すごく難しい。その当事者の方たちしか理解できないことがあるのに、それに対して自分の中で表面的に感情化してしまうことで、その人たちを傷つけるやり方になってしまう気がして。

だからこそ黙祷とか、小学校の頃から何度もやってきたけど、そのたびに自分が弔っているつもりになっているのがすごく怖くて、しかもそれが日常化して儀式化してしまっているのがあって。どういう風に向き合えばいいんだろう？ どういう感情でいればいいのか分からないし、どういう風に自分が非当事者として向き合えばいいのかもわからない……。

**全員** (沈黙)

**話者 H** 最近、「弔う」ってしました？ 日常的な言葉じゃないですね？

**話者 E** おじいちゃんの七回忌でやりはしたんですけど、もう七回忌だから、本当に悲しかったお通夜の時の悲しさっていうよりは、亡くなってしまったのを受け入れてはいるので、「おじいちゃんいたなあ」「あの時、あの話したなあ」っていう社会的な営み、親族の人たちと会って話す、それこそ儀式的な感じですね。

**話者 A** 10月頃、ガザで起きてることを知るセミナーにオ

ンライン参加した時、「はじめにみんなで黙祷の時間を取り  
ましょう」って言われてやったのが直近の記憶かな。その時  
の自分はどっだったかなっていうと、感情に寄り添うって  
いうよりは、知識として今ガザで何が起きているのかとか、  
ニュースで見た出来事とかが頭の中でぐるぐるして、あ  
んまり心を使って吊ったっていうより、わりと頭を、知識と  
かを整理する時間になっちゃってたかな。



## おわりに

初めて3.11を写した映像を見たのは2011年12月、かつて阪神淡路大震災で甚大な被害を受けた神戸市長田区で開かれた映画祭でした。わすれん！の参加者であった濱口竜介・酒井耕両監督が、津波の経験者の対話を丁寧に描いた映画、『なみのおと』。そのアフタートークで、ある観客がこんなことを語りました。「地震で自宅が倒壊してから15年、あの時のことを私も妻も一度も話せなかった。当時、こんなふうにみんなで映画をみる機会があれば、自分たちも言葉を持てたのかもしれない」。

誰かが誰かを写し、誰かに向けて覚悟をもって制作した映像。その表現を囲んで、出来事に近い人、遠い人がともに語り合う場がひらかれる——。災害の記録と表現がもつ可能性に関心を持った私は、2014年の出産以降、それまで訪れていた三陸沿岸部に足を運ぶのが難しくなったのを機に、自身が担当する大学の授業で3.11をめぐる映像や演劇作品を見たり、実際に制作者を招いてお話を伺う活動を始めました。それは私にとって、現場に赴いた表現者やさまざまな場所から来た学生たち、自分とは異なる複数の目と身体を介して、被災地の方々のかけがえのない記憶、ときに想像を絶する切実で困難な経験に、その絶対的な届かなさやわからなさに打ちのめされながらも向き合う、得がたい機会となりました。

ただここ数年は、震災当時に小学校低学年以下だった学生たちも増え、3.11の表現の受け止められ方が明らかに変化してきたと、感じるようになりました。そこにはたんなる「風化」や「歴史化」ではなく、コロナ禍やウクライナ等の戦災、人種や性差別への抵抗運動といった身近な困難を重ね合わせ、想像力を駆使して距離の遠い「3.11」に触れようとする、真摯な姿勢がありました。

2023年秋、初めて赴いたお茶の水女子大の授業で、本展示の制作者たちと出会いました。ある現代アート展の見学に同行した際、作品に表わされた理解しがたい「他者」を前に、彼女たちが安易な共感に走らずじっくりと向き合い、自らに引きつけて紡ぎ出した言葉に魅了されました。「今、彼女たちとなら、私も3.11を表現する側になれるかもしれない」。思わず、それまで私にとっては重たかった、わすれん！の戸を叩きました。

大学の授業という強制力の働く場で震災映像を見せることは、ある種の暴力を伴います。実際、映像を見た上で、今回の対話ワークショップに参加しないと判断した学生もいました。そのような中で、戸惑いつつもカメラの前に座り、言葉を交わしてくれた学生たちに、そして協力くださったわすれん！の皆さま、視聴させていただいた映像の制作者や被写体となった方々に、心から感謝いたします。

ここでいくつか、参加者たちの感想を紹介します。

- ・話し合い後、映像作品は一人で見た時とは異なる位相と思いを持って立ち現れた。
- ・震災の被害者のつらさを同程度に感じることはできないが、聞くことはできる。聞いて聞いて知って、何が起きたかを理解する。伝えてくれる機会を逃さないようにしたい。
- ・他の人との対話を通じて自らの思いを「形」にし、今まで抱いていた悲しみってなんだったんだろうと、自分の中に押し込んでいた感情を強制的に前に出したら、「自分」から抜け出すことができた。その救いを体感したからこそ、いつか誰かが思いを「形」にするのを支える側に立ってみたいと思った。
- ・人の記憶とか体験を聞いて、聞いた人は結局何をできるんだろう？ 教訓にするのか、いざとなった時に悲しみに打ち崩されないようにするためなのか？ 今回の対話や展示を作ってみて、災害の記録を残し、伝えていくことがどんな意味を持つのか、よりわからなくなりました。「問い」はどんどん増えています。

2024年元旦に能登半島で起きた震災は、3.11の記録と表現、その継承が、“今ここ”でどのような意味を持つかという問いを、より切実な形で私たちにつきつけています。本展の制作者たちから受け取ったバトン、その簡単には答えの出ないいくつかの「問い」を、これからも多くの方々の目と身体を借りながら、ともに考えていきたいと思います。

丹羽朋子 (Dialogue/Research/Trip)

---

Dialogue/Research/Trip (D/R/T 対話するリサーチトリップ)

厄災の記録と表現を、動きながら考える。

3.11など厄災をめぐる表現者や展示を訪ね、その旅のなかで生じる対話をプロセスごと記録するアート＝リサーチコレクティブ。2020年に始動時のメンバーは、ミュージアム研究の小森真樹（武蔵大学）、アーティストの野口靖（東京工芸大学）、文化人類学者の丹羽朋子（国際ファッション専門職大学）で、それぞれの専門性を交差させていく。2024年を目処に第一期の成果を公開予定。

「星空と路—3 がつ 11 にちをわすれないために—」展示資料  
(会期：2024 年3月7日～4月21日)

#### 映像に触れて、言葉を紡ぐ

——「正解のなさ」と向き合った大学生の対話の記録

#### 記録

お茶の水女子大学 学生有志  
丹羽朋子 (Dialogue / Research / Trip)

#### 展示・冊子テキスト制作

はじめに：平子七海  
『『生きられる家 (1) 吉田さん宅』をめぐる対話』班：瀬木和佳奈  
『『石と人』をめぐる対話』班：吉村紫織・野口真悠子  
『『過去を見直して、今を見つめる』をめぐる対話』班：丹羽朋子  
『『参佰拾壱歩の道奥経 抄』をめぐる対話』班：野本彩乃・平子七海  
文字起こし協力：松島有希・太田萌実

#### 対話ワークショップ参加・映像の感想コメント

お茶の水女子大学「民族誌学特殊講義」(2023) 履修者有志

#### 組版・印刷

3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター (せんだいメディアテーク)

一部、JSPS 科研費 21H00642、22H00011 助成

※ウェブサイトでの公開にあたり、本文を一部修正しています。